



月報

No. 438
2016年
11月

日本キリスト教団
茅ヶ崎香川教会
茅ヶ崎市香川1丁目34-35
<http://kagawachurch.jimdo.com/>

説教 『食べ物を与える主イエス』

(伝道礼拝)

マルコによる福音書 6章30節～44節

小河信一 牧師

本日の「五千人に食べ物を与える」というのは、聖書の有名な話で、四福音書すべてに出ています。主イエスが食べ物を与えるという類似の話は、全部で六つもあります（マルコ6章・8章、マタイ14章・15章、ルカ9章、ヨハネ6章）。

その中でも、マルコ6章にある話は、私たちに幾たびも「そうだよね」（そうそうあるある）という感じを抱かせる切り口と構成になっています。「そうだよね」と繰り返しつつ話の中に釣り込まれていって、最後、気が付くと、神の最も知らせたかったことを教えられる、という実に見事な展開になっています。

まず、「食べ物を与える」場所に関して、「人里離れた所」（マルコ6:31,32,35）であると強調されています。「人里離れた所」の原意は「荒れ野の場所」ということです。その「荒れ野」（原語：エレーモス）というのは、主イエスが四十日間そこに留まって断食し空腹を覚えられた「荒れ野」と同じ言葉です（マルコ1:12、マタイ4:1）。主イエスはそこで悪魔から誘惑を受けられました。つまり、以前に主イエスご自身、空腹を覚えられたことのある「荒れ野」が、パンと魚の増加の奇跡の舞台であることになります。

ここで、私たちの人生の旅路を思い起こすならば、「荒れ野」とはまさに私たちの人生そのものだと言えましょう。より正確に言えば、人生の旅路の中で、さまざまな出来事や事件が起こり、私たちはしばしば困難な状況に置かれることがあります、その点で、私たちは荒れ野時代を避けることが出来ないのです。もちろん、人生がただ荒れ野ばかりというのではなく、荒れ野と隣り合わせに、思いがけずオアシスや「青草」（マルコ 6:39）が見出され、そこが人生の良き訓練・教育の場となるということです。真の休息や平安は、私たちの深い飢え渴きのただ中にこそ在り、しばしば現れる人生の砂漠を乗り越える力の源になります。

今、主イエスのもとに戻ったばかりの十二弟子の滞在場所は、人里離れた所・荒れ野であり、主イエスと共に座る青草の茂っている所でした。「しばらく休むがよい」（マルコ 6:30）との主イエスの言葉通り、そこは弟子たちの休息所でした。私は「ガリラヤの風 かおるあたり」（讚美歌 228 番）を歌う時、主イエス、弟子たち、そして群衆が座っている湖畔の丘を、御国を想わせる光景を思い浮かべています。

マルコ福音書 6:30——

さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。

「①自分たちが行ったことと②自分たちが教えたことを」報告したという簡潔な文の中に、弟子たちの自己主張・自己満足が窺われます。自分たちはこれだけのことを行ったのだという訴えが優先されているように思われます。これより後代のことですが、パウロは第一回及び第三回の伝道旅行が終わった時、自分たちを送り出してくれた教会の人々に、次のように報告しています。

使徒言行録 14:27——

（アンティオキアに）到着するとすぐ教会の人々を集めて、（パウロとバルナバは）神が自分たちと共にいて行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。

使徒言行録 21:19——

（エルサレムで）パウロは挨拶を済ませてから、（ヤコブと長老たちに）自分の奉仕を通して神が異邦人の間で行われたことを、詳しく説明した。

パウロの報告は、「神が」という主語が基本であり、まさしく聖霊による伝道の実りを証ししています。

弟子たちが報告の第②に置いた「自分たちが教えた（原文：ディダスコー）こと」に関して言えば、主イエスは、パンと魚の増加という御業の前に、いろいろ「教え（ディダスコー）始められた」とあります。

マルコ福音書 6:34——

イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。

弟子たちが「時間もだいぶたった」し（マルコ 6:35）、そろそろお腹の具合が、と心配しだした頃、主イエスは熱心に神の教えを説かれていました。主イエスはご自身が荒れ野で、「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」（マタイ 4:4、申命記 8:3）と告げ、悪魔の誘惑を退けられました。

主イエスはご自身の経験を想起するかのようになり、パンの給食の前に、噛んで含めるように、「神の口から出る一つ一つの言葉」を群衆に教えておられたのです。「パンから」と自分の欲求に走りがちな私たちに対し、主イエスは「御言葉から」始めるという姿勢を保たれました。困難な時には殊に、「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」という原点に立ち帰ることが大切です。

さて、今弟子たちが置かれている人生の荒れ野の状況を、さらに詳しく見てみましょう。

マルコ福音書 6:33——

ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。

今し方、主イエスは伝道から帰って来た弟子たちに「しばらく休むがよい」とねぎらいの言葉を掛け、人里離れた所へ退去するよう命じられました。この「休む」という言葉は、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」（マタイ 11:28）の「休ませてあげよう」と同じです。従って、この「休み」は、神の平安に包まれた憩いの時と言ってよいでしょう。

ところが、主イエスの休息命令とは裏腹に、大群衆が押し寄せ、時が過ぎ行き、弟子たちの内には、安息ならぬ不安や嘆息が惹き起こされていっ

たようです。休みたいのになかなか休めない、かえって、問題がふくらんでくる、しかも、それは自分の責任といよりも他人の責任のように見える、それはまさに、私たちが遭遇する人生の荒れ野ではないでしょうか。問題が未解決のままであれば、なおさら荒れ野は広大に見え、そこから抜け出せないように感じられます。

不安に駆られた状態では、自分たちのそばにおられる「深く憐れむ」主イエスが見えなくなるものですが、実際、弟子たちはどうだったのでしょうか。

マルコ福音書 6:35-36——

35 そのうち、時もだいぶたったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、時間もだいぶたちました。36 人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買に行くでしよう。」

時間の経過を気にしつつ、弟子たちは、「人々を解散させて」、食べ物の問題を解決しようとしてしました。こんなに大勢の「他人の責任」まで負えないとでも言うのでしょうか。しかし、この世の判断として解散は、至極もったもなようにも思えます。

神の平安に包まれた憩いの時、本当の意味での休息に導こうとされている主イエスは、次のように弟子たちに語りかけられました。

マルコ福音書 6:37 前半——

これに対してイエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。

解散することはない、ここに留まりなさい、という主イエスの御心があらわされています。「あなたがたが」と言われる私たちではなく、「あなたが」、主が、どうにかしてください、と弟子ならずとも反論したくなります（そう言って、主イエスに寄りすがって、よかったのでしょうか）。この主の御言葉によって、弟子たちの罪深さが暴き出されました。

この「あなたがたが」を冷たく言い放たれた言葉として受け止めれば、弟子たちの堪忍袋の緒は切れたかも知れません。実生活において私たちがしばしばそうであるように、解決の糸口の見えない難題に直面し、恐らく、彼らはいらついていていたことでしょう。しかし、主イエスの御心は、空腹のピンチを切り抜ける際、弟子たちを用いて、食卓を整えること（詩編

23:5) にありました。

マルコ福音書 6:37 後半——

弟子たちは、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と言った。

この群衆にパンを行き渡らせるには、当時の労働者の日給、200日分の費用が必要と、弟子たちはソロバンをはじきました。彼らはある意味では、この世の常識的な「正しい」考え方に従っています。しかしそこで、主イエスの前に、現実^{あせ}に引き込まれてしまう愚かさや自分たちで問題を解決しようとする^{あらわ}焦りが露になりました。そうすると、弟子たちには、主が見えなくなってしまうことでしょう。そこに、主イエスに対する彼らの無理解が浮き彫りにされます。

マルコ福音書6:38——

イエスは言われた。「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」弟子たちは確かめて来て、言った。「五つあります。それに魚が二匹です。」

主イエスは忍耐深く弟子たちを用いながら、食卓の準備を進められます。主イエスは石をパンに変えることも（マタイ4:3）、また無から有をつくり出すことさえも出来るお方ですが、ここでは、今あるパン五つと魚二匹という恵みを、神がすでに人に与えたもうたマナ・食べ物を使われました。まさにここに、恵みを越えて恵み（ヨハネ1:16）の出来事が始まります。「この方の満ちあふれる豊かさ」において、少しの恵みが大きく増やされます。弟子たちの目には、「たったこれだけ」にしか、見えなかったかも知れませんが……。そこで、主が主導し、弟子が仕える食事が始まります。眼前に湖水の広がる、「青草」の原（マルコ6:39、詩編23:2）という食事の席が、一人ひとりに用意されました。さあ今こそ、「しばらく休むがよい」と主イエスが宣言された憩いの時が巡って来ました。

マルコ福音書6:41——

イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、①天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを②裂いて、弟子たちに渡しては③配らせ、二匹の魚も皆に③分配された。

この世的な思い煩い^{わずら}に引きずり込まれそうになっていた弟子たちを前に、主イエスは①天を見つめられました。そこには、私たちの魂が天に引き上げられるように、霊的な世界の豊かさを仰ぐように、願い祈られている主

イエスの御姿があります。

そして、②「パンを裂いて」の一句は、主イエスご自身に関わることで、
「そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け」（マタイ27:51）という十字架の出来事が思い起こされます。この裂かれたパンは、主の体であり、その主の十字架の死によって、私たちは救われたのです。

湖畔での給食の奇跡は、私たちの教会が執り行っている聖餐式の予型となっています。弟子たちに、また教会では役員に、③配るといふ奉仕が託されています。主から受けたものを、人に分かち与える、神から自分にパンまたは愛が与えられ、そして隣人にそのパンまたは愛を分かち与える、ここに神が望まれている愛の交わりがあります。この愛の交わりのうちにこそ、私たちは本当に安らいで過ごすことができます。

マルコ福音書6:42-44——

42 すべての人が食べて満腹した。43 そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。44 パンを食べた人は男が五千人であった。

給食の奇跡と前段とこの結末とを比べてみると、違いは明らかです。

初めての派遣から帰って来たばかりという事情があるにしても、「彼らは行った」とする報告の内に、弟子たちの自己主張や自己満足が潜んでいました。それに対し、ここには、主が主導し、弟子が仕え、そして大勢の人々が充足し、なお余りがあったことが書き留められています。

人の行うことと神のなされること、人の業と神の御業、どちらが中心であり、どちらが豊かで余りあるか、あらためて言うまでもありません。ここには、神の恵みによる満腹が語られています。

問題は、食べ物が足りなくなることがあるという古今の世界の重大事を抱えている私たちが、籠いっぱいになるほどに恵みを与えてくださる神に寄り頼むかどうかです。私たちが寄り頼むよう導いてくださる父なる神は、この世に、御子イエス・キリストを遣わしてくださいました。

民数記 11:23 シナイの荒れ野において——

主はモーセに言われた。「主の手が短いというのか。わたしの言葉どおりに（出来事に）なるかならないか、今、あなたに見せよう。」

弟子たちと同様に、大群衆をかたわらに、肉の糧の乏しさを訴えたモーセに対する神からの答えです。

神の言葉、すなわち、神の約束は、必ず出来事となります。主イエスご自身が教えてくださった「我らの日用の糧を今日も与えたまえ」（マタイ6:11）との祈りの言葉を信じて祈るのです。貧しく弱い人々が飢えないようにするという言葉になるか、ならないか、そのことを私たちが結論づけるのではなく、主イエスにゆだねるのです。天を仰いで祈られた主イエスのように、天の高みから、つまり、心を高く引き上げられて、地にあるさまざまな問題を見渡すことが大切です。

給食の御業を行ってくださった主イエス・キリストによって、私たちは教会で聖餐式を執り行うことが許されています。そして今、私たちは、天の国で大祝宴が開かれる日を、再臨の主が「入って来なさい。座りなさい」と言われる日を待ち望んでいます。

私たちの人生の旅路を支え、荒れ野をオアシスに変え、ひとすじに天の国へ導いてくださる主イエスの約束を心から信じたいと願います。

茅ヶ崎香川教会月報

No. 438

2016年11月27日発行

編集発行：日本キリスト教団

茅ヶ崎香川教会

発行責任者：小河信一

編集責任者：鈴木隆二